

4. ダグラス・クリンプ『美術館の廃墟に』

◇はじめに◇

ダグラス・クリンプは『美術館の廃墟に』で、モダニズムが死に絶えたとするポストモダニズムの立場から美術館批判を展開している。冒頭にある「美術館とは、累代の芸術作品たちの墓場なのである」というテオドールのエッセイの引用からみてとれるように、彼は美術館の廃墟を指摘するとともに、そこに歴史的な深みを与えている。

発表ではモダニズムからポストモダニズムにおける美術館をみていく。そしてそこから、今における美術館、さらにはポストモダニズムについて考えていきたい。

1. 絵画からみる美術館の変容

◇モダニズムの死、ポストモダニズムの台頭

- ・ヒルトン・クレマーのサロン芸術批判 → サロン絵画は死に絶えたもの
- ・テオドール・W・アドルノ「美術館のような(ムゼアール)」
→美術館の死の運命を指摘し、それはモダニズムの制度がその文化的矛盾にとらわれたことから必然的な結果であると考え
- ・モダニズム体制の美術館の在り方への疑問
→ポストモダニズムの下では、「すべてが許される」「何でもあり」になっていく

◇ポストモダニズム芸術の一例

- ・ロバート・ラウシェンバーグの平面絵画「フラットヘッド」
作品:「パーシモン(柿)」1964

◇問題視される、絵画とその源泉との関係

- ・マネとラウシェンバーグの対比
マネ:構造的・一貫性 ⇔ ラウシェンバーグ:異種混交性
- ・ミシェル・フーコーの「考古学」
伝統・影響・発展・進化・根源・起源といった歴史観念を、
非連続性・烈開・闕・変容へと置き換える
→ ラウシェンバーグの絵画平面は、モダニズム(過去)との烈開や非連続性をもたらすものと考えることができる

2. アンドレ・マルロー『空間の美術館』=「図版による美術館」

◇異質なものの収集

- ・美術館(博物館)は図書館をも含む
→美術館の収集物は異種混交的
- ・美術館は考古学的認識論に依存
→考古学的な構成物は起源の構成物
→起源の構成物がそれに続くより大きな歴史の「意味」を説明

- ◇一貫した表象を作り上げる虚構
- ・秩序づけと分類、いわば諸断片を空間的に配列

3. 複製技術と美術館

- ◇複製技術のもたらした世界
- ・どんなものでも「カラー図版」となれる
- 世界中、数多くの芸術作品を簡単に目にすることができるようになる
- それは、ものとしての特性を喪失するが、同時に様式上の重要性を獲得する

- ◇『空想の美術館』
- ・芸術と呼ぶ製作物すべて、あるいは少なくとも写真複製のプロセスに従うものすべて
- 偉大な超一作品として地位を得る
- ・真に存在する「人類」そのものによって創造された芸術であろうとする
- 『空想の美術館』が証言する、写真へ慰めを与える認識にほかならない

- ◇ヴァルター・ベンヤミン
- ・「機械的複製によって絵画芸術はそのかけがえのないアウラ（作品の一回性、真正性）を喪失し、消え去っていかだろう」 →アウラの喪失
- ex. ラウシェンバーグの作品 – ポストモダニズムの芸術

4. 美術館建築からみるポストモダニズム

- ◇国立美術館（ドイツ・ベルリン） – 旧館と新館
- ◇ユダヤ博物館

5. 美術館嫌悪（症）ミュージアム・フォビア

- ◇戦後（1960年代）から、モダニズムの美術館制度に対する疑問や批判が出てくる
- ・「インスタレーション」「アースワーク」「パブリック・アート」など新しい芸術の形態による、美術館への収蔵を拒む性格
- モダニズム芸術の自律性＝閉鎖性の最大の要因であると考える

◇考察◇

こうして発表でみてきた通り、今日の美術館の価値観が、モダニズムでの唯一無二で一貫性のある作品を崇める「自律性」の価値から、ポストモダニズムでの何でも許される「異種混交性」の価値へと移行した。

それを踏まえたと私たちは美術館を、モダニズムの制度の中で「傑作」といわれた歴史的な作品を収蔵し敬称していく立場と、それとは逆に、モダニズムの美術館の閉鎖的な面を批判する立場をとることができる。

また複製技術においては、ベンヤミンの見解のように作品の伝統と「アウラ」を重んじる立場から批判することもできるが、逆にマルコーの『空想の美術館』のように図版によって誰もがすぐに見ることができるという作品の大衆化を評価し、コピーの氾濫を肯定する立場もとることができる。

このように、ひとつの事柄にたいしていくつもの立場から考えることができるようになったきっかけは、モダニズムの「一貫性」から何でも許され、ありとなる「異種混交性」のポストモダニズムへと移行したことなのではないだろうか。自分たちの立場を選べるようになった今日において必要となるのは、吞まれるほどある情報の中から、自分なりの見解を出し、自分の立場を持つことであり、そこでは「主体性」が常に問われるべきである。